



## 編集・発行

アカデミア・コンソーシアムふくしま事務局

〒960-1296 福島市金谷川1番地  
福島大学 地域連携課内  
電 話 024-548-5295  
メー ル acf@adb.fukushima-u.ac.jp  
URL http://acfukushima.net/

## 大学間連携共同教育推進事業のご報告

## ◆ かえるかわうち

## 空と大地の夏祭りを開催!!

真夏の太陽が照りつける8月11日(日)、川内村コミュニティセンターと体育館において「かえるかわうち空と大地の夏祭り」が実施されました。この夏祭りは昨年度の川内村訪問・調査で川内村の帰村率が低く、特に子どもがいる世帯が帰村していない実情を知り、子どもたちは勿論、家族で楽しめるイベントを企画したいという学生たちの思いから実現に至りました。当日は当事業の趣旨に賛同したふくしま飛行協会様の協力により、川内村民限定のヘリコプター体験飛行が行われ、屋内ではふくしまサイエンスぷらっとフォーム(spff)様の協力で化学実験教室が行われました。連携校である郡山女子大学による手作りカレーライスの販売や残暑見舞い作り、フルーツなどの糖度測定、そのほかテクノアカデミー郡山のLEDを作ったおりがみほたる作りなど盛りだくさんの出店がありました。特に福島大学の学生たちは事前の準備、当日の運営、後片付けに至るまで中心となって取り組み、夏祭りに係る大人たちと協力して運営し成長する姿が見られました。



当日の来場者はおよそ270人。川内村だけでなく周辺の町や帰省した人など多くの家族連れが訪れました。この日、川内村には夏祭りに来た人・夏祭りを運営する人みんなに笑顔があり、充実した一日となりました。



## ◆ 旧山古志村訪問・調査に

## 行ってきました

平成16年10月に発生した新潟県中越地震。震源地に程近い旧山古志村では甚大な被害を受けました。旧山古志村の人々はどのような避難生活をし、帰村したのか?

9月2日(月)～3日(火)に学生15名(桜の聖母短期大学・福島大学・福島県立医科大学)・引率5名(桜の聖母短期大学・福島大学)が、現地の被害の様子や復興の様子を視察し、さらに震災を経験した人の話を聞いて、学生の視点で福島県の復興に役立つことを見出すために、訪問・調査に出かけました。現地では、地震による地滑りで堰き止められた川によってできたダムで水没した家が現在も残されており、自然の脅威を見せ付けられました。また、旧山古志村の人々が伝統文化である闘牛や錦鯉の養鯉に誇りを持ち続け、伝統を守っている姿や震災時に援助してくれた全国の人々に感謝する姿に感動しました。

伝統文化を守り、若い世代に受け継いでいくことに生きがいを感じつつ、震災前から育まれてきた地域のコミュニティによって助け合いながら、旧山古志村で暮らす人々の輝く姿こそ、帰村して復興することの原点であることに気づかされた2日間でした。



## ◆ 発電所見学会を実施しました

福島県内の大学生等が福島の復興を思い描くために、地域の産業としての電源開発は当然、原子力エネルギーに依存しない次世代のエネルギー開発についてもリアリティを伴う教養を得るため、今般の見学会を実施しました。企画は会津大学短期大学部の石光ゼミの学生さんたちが入念に調整を行い、のべ60名近い学生・教職員が参加をしました。

第1回は8月28日に相馬共同火力発電新地発電所を見学しました。今回はタービン建屋や集中制御室などを特別に見せていただき、また最新鋭の石炭を粉碎して効率よく燃焼するための装置や粉碎された石炭なども見ることができ、充実した内容となりました。



第2回は9月4日に東北電力女川原子力PRセンターを見学しました。途中、高速道路の事故渋滞で到着が3時間も遅れ、閉館時刻間近になってからの入館となりましたが、きちんと展示施設を説明しながら案内していただきました。途中、津波で被災した女川町内も見学でき、遠方まで繰り出した価値のある見学会となりました。

この企画は来年度以降も継続して、福島の電源開発の今後を考えていくために実施していく予定です。来年度の企画もお楽しみに。



## ◆ 第2回合宿型討論会を開催しました

まだまだ暑さの残る8月31日(土)～9月1日(日)にかけて、1泊2日の「合宿型討論会」を開催しました。今回で第2回目を迎えるこの「合宿型討論会」は、本事業で連携している機関の学生、教員、職員、地域のステークホルダーと一緒に、求められる人材について語り合う場です。今回は「なりたい自分」を統一テーマに、話題提供、個人ワークシート作成、グループワーク、ソロ・ウォークと様々な活動を行いました。はじめに、NEC人事部の祢次金万紀子氏、オペラ白虎チーフプロデューサーの石原正之氏を講師としてお招きし、幅広い観点で話題提供をいただきました。

その後は、講師の方も含めて「考える」、「語り合う」ことを参加者全員で共有しました。ここでは書ききれない部分もありますが、「改めて」という言葉がたくさん見られました。リラックスした雰囲気の中、新しい発見や気づきだけでなく、既に持っているのに日々の生活の中に埋もれてしまっていた何かを「思い出す」ことができる合宿となりました。



## コラム ～ ACふくしまの事務局から ～

### ◆ 「はじめて」と出会う日々

研究員 高森 智嗣

研究員の高森と申します。さて、私こと2012年12月より着任いたしまして、まだ「ふくしまの1年」を経験しておりません。九州は熊本県出身のため、東北地方の冬は未知の世界でした。着任早々積雪に驚き、昭和村にて今年4月21日に雪が積もっている風景には唖然としました。今年は例年よりも雪が多いとのことでしたが、すっかり雪国のイメージが定着してしまいました。靴底に滑り止めがついているビジネス・シューズや雪かき用具に融雪剤等々、福島では当たり前グッズも私にとっては「はじめて」のものばかりです。

また、今年は夏がそれほど暑くなかったようで、自宅のエアコンを使うことがほとんどありませんでした。この時期ですと、夜はもう肌寒い日もあり、窓を開けたまま寝てしまい翌朝後悔するということもしばしば。驚くことばかりでしたが、その内「今年はどうだったね」なんてことを言うようになるのでしょうか。新参者ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

次号は11月1日(金)の発行予定です。